藝文学苑　オープン講座

都の姫君 東(あづま)へ下る

～常陸国の豊かさとともに都人の憧憬がうかがえる物語を楽しんでみましょう～

講　師　瀧口　泰行（古典学者、常磐短期大学名誉教授）

現在私たちが親しんでいる古典の多くは皇室を中心として生まれたものであり、皇室のそば近く仕えた人々によって、貴族を中心とした教養として発生し、発展したものです。

しかし、都人の興味は自分たちの生活を豊かに支える地方の風土や人々の営み、信仰世界にも向いていました。

そこで今回は都と地方との出遭い、言い換えれば“みやび”と“ひなび”の接点に触れてみようと思います。

時代は平安時代の半ば、歌会も盛期の頃です。常陸から訴訟のために上洛した豪族(常陸大掾)は、ふとした風のいたずらで御簾(みす)の吹き上がったところに垣間見えた姫君の美しさに一目ぼれ、妻にすべく一計を案じます…。さて、どうなりますことやら一緒に読んでみましょう。この姫君は、上東門院彰子に仕えた歌の上手で、紫式部もその美しさを絶讃した女房のむすめでした。

“都のてぶり”は東国に伝わったのでしょうか。

講義日／ 2月21日 土曜
時　間／13：30～15：30
回　数／1回
受講料／1,100円（税込）
会　場／水戸教室